

学会報告:クリティカルリンク 8 Critical Link 8

大野 直子
(順天堂大学)

「A new generation: Future-proofing interpreting and translating」をテーマにした国際学会 "Critical Link 8" が、2016 年 6 月 29 日から 7 月 1 日までスコットランドのエジンバラにある Heriot-Watt University で開催された。学会の開催された当日は小雨がぱらつき、肌寒い天気であった。エジンバラ空港から車で 30 分の郊外にある Heriot-Watt University は、住宅街の中にある小規模の大学である。Heriot-Watt University は 1821 年に創立され、王室の金細工師で博愛主義者の George Heriot と発明家で機械技術者の James Watt に因んで名づけられた。大学内には通訳翻訳研究所 The Centre for Translation & Interpreting Studies in Scotland を擁しており、School of Management and Languages には、これまでに度々講演のため来日されている Claudia V. Angelelli 先生がおられる。

Critical Link 8 では通訳翻訳関係者 400 名以上が一堂に会し、新世紀の通訳翻訳というメインテーマのもと、いくつかのサブテーマに分かれたセッションでの研究発表を行った。学会の開催は 8 回目だが、私自身は Critical Link では 3 度目の発表であった。前回 2013 年にトロントで開催された Critical Link 7 は、学期の最中であったためか、日本からの発表者は 2 名のみであったが、今回は金城学院大学の水野真木子先生、豊橋技術科学大学の毛利雅子先生、順天堂大学の吉田理加先生、大阪大学の加藤純子先生、筆者の少なくとも 5 名が発表者として参加しており、日本人の聴講者も、大学院生や医療通訳関連団体の方など多様であった。学会の前日から会場と宿泊場所(寮)がオープンになっており、同時通訳訓練の体験セッションが行われるなど、前日のイベントも充実していた。

前回と同じく、今回も学会ではパラレルセッションという形を取っていた。基調講演は 3 日の会期のうち毎日午前中に実施された。スピーカーは下記のとおりである。

1. "A language which he understands: the role of the interpreters in court proceedings", presented by The Rt Hon Lord Carloway (Colin John MacLean Sutherland) Lord President and Lord Justice General
2. "Territories of knowledge: on the interactional negotiation of access to knowledge in interpreter-mediated interaction", presented by Professor Laura Gavioli (University of Modena and Reggio Emilia, Italy)
3. "Machine Translation for Media Accessibility-Subtitles, Sign Languages and Beyond",

presented by Prof. Dr. Martin Volk (University of Zurich, Switzerland)

(プログラムの詳細と抄録は <http://ctiss.hw.ac.uk/research/conference-programme.html> で閲覧可能である)

また、今回新たな試みとして、最終日に行われたフランツ・ポエヒハッカー先生が座長を務める”Future-proofing Interpreting and Translation: The road ahead” という表題の Plenary Panel がインターネットでライブ配信された。セッションの中では、事前にインターネット上で受け付けた質問や意見を取り上げながら、パネリストがディスカッションしていた。

発表は全て同じ建物の同じフロアで実施されたため、会場から会場への移動が非常に楽であったが、発表が Healthcare, Legal, Court, Immigration & Asylum, Education, Cross-sector の分野で分けられパラレルセッションが 10 か所で並行して行われていたため、聴講したい発表が重なって聴けず、後で内容をシェアする場が欲しかった、という声もあった。

印象に残った発表をいくつか紹介する。まず、初日に 1 時間半の枠を取って実施されたパネルディスカッションで、Critical Link International 会長の Angela Sasso 氏が中心となって実施された "Working Conditions and Public Service Interpreters: The State of the Field from the Perspective of the Practitioner "である。この発表は、カナダ、イタリア、スペイン、アメリカ、日本、エジプトにおけるコミュニティ通訳者の報酬、雇用の安定、労働条件、就業構造、その職業の受け取られ方について報告するもので、私は日本の現状について報告をした。イタリアの Paula Gentile 氏は世界中の会議通訳者とコミュニティ通訳者に自分の職業に関する認識についてのアンケート調査を行い、1693 件の回答を得て、その傾向からコミュニティ通訳者の実像を報告した。彼女によれば、コミュニティ通訳者は法廷通訳者と警察通訳者は男性、医療通訳者は女性が多いとのことだった。またコミュニティ通訳のみでは生計を立てるのが難しく、翻訳者、教員、講師と両立している者が多かった。ボランティアのコミュニティ通訳者はほとんどいなかったが、少数医療通訳者でみられたとのことだった。エジプトの Alice Jonson 氏が報告をしたカイロ・コミュニティ通訳プロジェクトは移民と難民からの要請で発足したプロジェクトであるが、そこで移民出身のコミュニティ通訳者が逮捕、拘留、国外追放される危険が増しているという報告を受けたことが印象的であった。

ポスター発表では、今回も口頭発表ではあまり見られなかった手話通訳関連の研究が報告されていた。また全体向けの会議には、国際手話とアメリカ手話両方の手話通訳が常についていた。Gala はエジンバラ中心部のレストランで行われ、コース料理とスコットランドの踊りで深夜まで盛り上がり上がっていた。

今回、筆者は発表者としてのみならず、主催団体 Critical Link International の Asian Representative という理事会メンバーとして学会の前日の理事会に参加したり、Scientific Committee のメンバーとして発表原稿の査読を担当するなどの機会を得た。そして、学会開催前には次期開催国として日本と南アフリカが候補に挙がっており、学会開催中に正式に開催国が日本に決まった。閉会式では、次期開催地の発表後に日本に招致するスピーチを英語と日本語対応手話で行ったのだが、横で国際手話とアメリカ手話でも通訳をされており、3 つの手話で同時にスピーチが通訳されることとなった。

今回の学会では、世界中から集まった参加者の方から、研究テーマや各国の最近の研究動向についてうかがうことができた。次回の Critical Link 9 はアジアでの初開催であり、東京で 2019 年

に開催予定である。法廷通訳、警察通訳、医療通訳はもちろん、手話通訳に関しても、アカデミックと実務の両方の分野で発表が可能であるので、多くの発表者に参加して欲しい。次回の東京でのCritical Link 9が研究者と実務者をつなぐ(Link)場となり、多くの参加者が集い、発表やイベントを通じて分野や国を越えて交流できる意義ある会となること、2020年の東京五輪を前に、日本におけるコミュニティ通訳が盛り上がり発展する契機の1つになることを願っている。

.....
【著者紹介】

大野 直子(OHNO Naoko) 2007年、英国バース大学通訳翻訳学修士課程修了。2012年、東京大学大学院医学系研究科社会医学専攻博士後期課程修了。現在は、順天堂大学国際教養学部講師(医療コミュニケーション、医療通訳)、津田塾大学非常勤講師(通訳)。